

カントの宗教批判—迷信について—

村野 宣 男

Kant's Criticism of Superstition

Nobuo Murano

序

カント (Immanuel Kant, 1724~1804) は、‘理性’に強い関心を抱いている。このことは、宗教を論ずるに際しても同様であって、カントの宗教論が、『単なる理性の限界内における宗教』(Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft, 1793) - 以下『宗教論』と略-と名づけられていることから窺える。しかし、宗教と理性の関係に関して、カントは二通りの見方をしていると考えられる。一つは啓蒙以前の宗教の形態に関する問題である。ここでは、宗教は人間を蒙昧なる状態にとどめるものと見られ、当然批判の対象となる。他の一つは、『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft, 第一版1781, 第二版1787)における、理性の限界のかなたに存在する宗教である。ここでの宗教の概念は、『実践理性批判』(Kritik der praktischen Vernunft, 1788)・『判断力批判』(Kritik der Urteilskraft, 1790)・『宗教論』で問題とされているのであるが、カントにおける宗教と理性の問題を考えると、先ず第一に‘宗教批判’を注目する必要があると考えられる。じつは、この問題は、『宗教論』でも最後の課題とされているのであるが、‘宗教批判’を通して宗教の否定されるべき形態、宗教と理性のかかわりの方向性、あるいは理性そのものの意味等について考えさせられることが多い。宗教批判に関する考察は、『宗教論』に

おける「根本悪」の問題に入る前段階として重要であるばかりか、カントの宗教論全体を見通す視点を与えているように思える。

本論では、宗教の非理性的形態に関してカントが行っている分析をたどり考察を試みる。特に、非理性的形態の代表的なものと考えられる迷信の概念の分析を中心として考察を試みることにする。カントは、迷信に言及するもののまとまった形で論ずることがないので、著作の各所を参照することにした。

宗教に関して、非理性的あるいは理性的ということの問題とすると、自ずから理性とは何かということが課題となってくる。そして、ここでは‘反省’ということが問題となる。宗教の形態が非理性的・アニミズム的であるか、あるいは理性的なる高等宗教の形をとるかは、ひとえに反省的であるか否かにかかっていると考えられるからである。迷信とは何かという単純な問いも、辿っていくと人間の思考法全体に通じるのであり、カントの哲学体系全体を見ざるを得ないこととなる。本論は、概略的な論述ながら、問題の所在を明らかにすることを意図するものである。

1. 迷信的思考法の構造

1) 迷信的思考法の形態

カントはFriedrich大王(在位、1740~86)の下に、自由な啓蒙的空氣を享受したのであるが、Friedrich Wilhelm II(在位、1786~97)

は、宗教統制を行った結果、1793年の『宗教論』の出版に当たっては、在籍しているケーニヒスベルク (Königsberg) 大学ではなくイェナ (Jena) 大学に許可を申請しなければならなかった (1792年)。しかるに、Willhlem II の死の翌年1798年に『学部争い』(Der Streit der Facultäten) を出版し、自己の宗教観を開陳しているが、カントはそこで迷信 (Aberglaube) に関してきわめて明確な説明を行っている。“迷信とは、自然的経路で生じたものではないと考えられるものに自然法則にしたがって説明されるものより大なる信頼を置くところの性癖 (Hang) である。——この性癖は物理的なものにも道徳的なものにも認められる。”¹ 迷信の例として占星術が挙げられる。“もし、星の形、組み合わせあるいは遊星の位置が、人間に生ずる運命に関しての天空における寓意的文字記号として (占星術において) 表象されるならば、天文学は子供じみたものとなる。”² とされ、占星術が天文学に対する関係は、錬金術が化学に対する関係であるといわれる。³

迷信には物理的なものもあれば道徳的なものもあるとされているが、占星術は行為ではなく関係性のみを問題としている故に、道徳的とはいえない。カントの例には見当たらないが、雨乞いは物理的迷信といえる。しかし、カントは実践的・道徳的迷信に強い関心を持っていた。例えば、『宗教論』では、次のように言われる。“人間が、自己の願望を達成するために神の恩恵を得ようとして、神意に適うもの (道徳的なもの) を何ら含んでいない行為を手段とするならば、その人は自然的手段 (das natürliche Mittel) によって、超自然的効果を獲得しようという妄想 (Wahn) にある。このような試みは一般に魔術 (Zaubern) とされ、この語をわれわれは……呪物崇拜 (Fetischmachen) という語と取り替えた。”⁴ 道徳的意図なく、功利的目的のために、単なる形式的行為によって神が崇拜されるならば、ここでは実践的・

道徳的意味において理性的であるとはいえないこととなる。カントは次のように言う。“神の前で自己を正当化するために、祭祀 (Kultus) という宗教的行為によってなんらかのことができるという妄想は、宗教的迷信 (der religiöse Aberglaube) である。……人間がよき人間となる必要もなしに、誰でもができる行為によって、神意を得ようとするのは迷信的妄想である (例えば、決まり文句による告白、あるいは教会規律を遵守すること等によって)。これは、次の理由によって迷信的である。すなわち、人は単なる自然的手段 (道徳的でない手段) を選ぶのであるが、それは自然的でないも (すなわち倫理的善) に対して、それ自体まったく効果を及ぼすことができないからである。”⁵ 迷信は、そもそも功利的欲望が動機となっている故、最初から道徳的であるとはいえない。通常の非道徳的行為と異なるのは、超自然的力を媒介とするところである。物理的迷信である、占星術あるいは雨乞いの術の場合も、その背後には功利的意図が認められるのである。

古来、非道徳的的形式的手段によって現世利益を得ようとする迷信的信仰が存在しているのであり、カントによればこれは現代においても頻繁にみられることであるとされる。『宗教論』の最後の課題は「法規的宗教における神への偽奉仕」(第4編、第2部) と題されているが、迷信はまさしく神への偽奉仕なのである。ここでカントはツングース族のシャーマンやシベリヤの原住民ウォグリツェン (Wogulitzen) とヨーロッパの高位聖職者あるいはピューリタンの間にも“たしかに、その様式においては相違があるが、信仰の原理には違いがない”⁶ としている。

なお、カントは迷信は妄想であると言うが、迷信と狂信 (Fanatismus) についての区別は興味あるところなので一言しておきたい。『美と崇高の感情にかんする観察』(Beobachtung über das Gefühl des Schönen und Erhabenen, 1764) において、次のように

言われる。“逸脱は、先に見たように、国民感情の印である。したがって狂信はおもにドイツとイギリスにみられる・・・狂信的な精神の高まりは次第にさめて、その性格上ついに秩序だった中庸に至るに違いないが、迷信は平静にして受動的な性格の中に、取り返しきかない状態で深く根付き、とらわれている人間を有害なる妄想から解き放つという望みを奪うのである。”⁷ここでカントは、迷信は思考法の誤りすなわち妄想であることを強調している。

2) 迷信的思考法の構造

以上迷信的思考法の形態を見た。すなわち迷信とは、物理的あるいは道徳的な思考法とは異なる。迷信では星という物理的自然現象が物理的でない人間の運命に関係づけられたり、それ自体道徳的でない形式的行為（たとえば、呪文）でもって神とのかかわりを持ち、功利的効果を得ようとするのである。ここでは、更に踏み込んで迷信的思考法の構造を吟味し、この思考法を克服する方向性を示すこととする。

まづ第一に明らかなのは、迷信的思考法の特徴は‘非理性的’であるということである。しかるに、‘理性的’とは何を意味するかが問題となる。『実践理性批判』の「結び」において、カントは、無限に広がる天空と自己の内なる道徳法則に思いをいたしているのであるが、ここには理性の使用（*der Gebrauch der Vernunft*）がかかわっているとす。そして、理性が欠如するときには占星術と迷信が生まれとされる。⁸しかるに、‘理性の使用の’‘理性’とはなにを意味しているのであろうか。理性的であるところには世界に対する判断がなされ、しかも論理的な体系推論があるとすれば、迷信的・アニミズム思考法にも判断があり、論理があるといえる。カントが意味するところの‘理性的である’ことには‘経験的である’という条件が必要である。まさしくこの条件が、カントの哲学

を批判哲学たらしめているのである。『人間学』（*Anthropologie in pragmatischer Hinsicht, abgefaßt von Immanuel Kant, 1798*）において、理性の性格は次のように説明されている。“理性は、理性の法則なしに、理性の使用を試みるところの遊戯としての詭弁とは異なるのである。わたしは、幽霊を信じるか否かという問いが立てられるとき、幽霊の可能性に関してあらゆる方法でもって推論することができる。しかし、理性は、経験法則に従った現象の説明なしに、迷信的に幽霊の可能性を認めることを禁じるのである。”⁹人間は、“経験の大地（*der Boden der Erfahrung*）”¹⁰を踏みしめて進まなければならないとされる。目の前にある大地を行くことなく、主観を客観と取り違えてはならない。“獵師、漁師、賭博師（特に宝くじ）は迷信的であり、主観的なものを客観的なものとする、すなわち内的な感覚を事柄それ自体の認識とするという欺瞞たる妄想が彼らを誤らせるのである。迷信への性癖もこの欺瞞によって理解される。（下線筆者）”¹¹

迷信も一つの判断であるが、これは経験に基づくことなく、主観を客観と取り違えるところに成立する。ここには明らかに錯誤がみられるが、これは単なる認識上の錯誤とは異なる。たとえば、幽霊の存在はカントの体系においては、認識の問題ではなく、『判断力批判』における‘構想力’の所産であると考えられる。迷信の問題は『判断力批判』までを視野に入れて考える必要がある。

カントは『純粹理性批判』において誤謬に関して次のように述べる。“誤謬は、感性の悟性に対しての気づかれない影響によって生ずるであろう。これによって、判断の主観的根拠と客観的根拠とが一緒になってしまうのである。”¹²“内容のない思惟は空虚であり、概念のない直観は盲目である。”¹³といわれるように、認識は感性と悟性の共同において成立するというのがカントの認識論の基本である。認識が、空虚にも盲目にもならないため

には、観念に先走っても、感性に埋没してもならない。両者をいかに調和させるかが『純粹理性批判』の目的の一つである（他の目的は、理性の越権を検証する弁証論である）。確かに迷信には、感性の影響が強く見られるものの、迷信の錯誤は、経験的感性と理性に留意しつつも不注意のために生ずる認識上の錯誤とは異なった脈絡の上に成立するものと考えられる。

『判断力批判』は認識的判断ではなく感情（Gefühl）による判断を問題とする。感情の世界はフィクションにまでも広がるのであり、限定的な認識の世界とは異なり自由である。われわれは表象する世界に対して、限定された認識の方向に進むこともできれば、自由な感情の世界に遊ぶこともできる。古代人であろうと、現代人であろうと世界は同じように表象（Vorstellung）している。たとえば、星は古代人と現代人に別様に現れているのではない。同様の形で‘前に置かれている（vorstellen）’のである。しかるに、古代人と現代人とでは、表象に対しての判断に違いが生じる。現代においては表象にかかわる感性的経験を条件として科学的に認識的判断がなされる。古代においては、表象との感情的関わりに入り、想像力によって形成された観念をもって判断を行う。想像力（構想力、Einbildungskraft）は、科学的認識においても重要な役割を果たしているが、あくまでも感性的経験の範囲に限定されているのに対して、感情の世界においては空想的自由がある。カントはこれを‘構想力の自由な遊び（das freie Spiel des Einbildungskraft）’¹⁴としている。迷信とは、主観的な構想力によるものを客観的・認識的なものと取り違えるところに生じるのである。星の形や組み合わせを見て何らかの意味を見出すことは、たんに主観の想像力の所産である。また、この星と人間との間に何らかのかかわりがあるとすることも共感的想像力の所産に他ならない。このことを客観的・認識的なこととするところに占星

術たる迷信が生まれるのである。カントの言う主観的なものと客観的なものの取り違えとはこのことを意味する。

表象を感情の対象と見る場合も、見方によっては異なる。例えば、料理にしても、単に直接的感性の満足の対象である場合もあれば、また、感謝の喜びの対象であることもある。カントによると、対象に対する感情と欲求は結びついているのであり、欲求のあり方によって、対象は単に快適（angenehm）¹⁵となるか、ありがたさの感情となる。前者の欲求は下級（unter）であり、後者のは上級（ober）である。¹⁶また、感情がこのような欲求能力（Behehrungsvmögen）とかわることなく、単なる観照に止まるときには、美的判断（das ästhetische Urteil）¹⁷がなされるとされる。“〔美的判断である〕趣味判断（Geschmack）は、ある対象あるいはある表象形式に対する適意・不適意による判断能力であるが、ここにはいかなる関心性も存在しない。このような適意の表象が美しい（schön）といわれる。”¹⁸

迷信的思考法の場合には、例えば占星術のように、星に対して構想力が働き、感情が抱かれるのであるが、この感情は美的なものではない。ここには、人間の運命を知るというプラグマティックな関心がある。いわば、現世利益的な下級の欲求が見られるのである。先にも述べたように、このような迷信的思考法は、現代におけるキリスト教にも見られるところである。

以上のように、迷信的思考法（アニミズム的思考法）をカント哲学の体系の中に位置づけることができる。

2. 迷信的思考法からの脱却

以上、迷信的思考法がカントの哲学的体系の中で、如何に位置づけられるかを見たのであるが、つぎにこのような思考法からいかに脱却するかが課題となる。カントにとっては、この問題は、迷信的思考法それ自体を究明す

ることより重大なものであった。

1) 反省的であることについて

迷信的思考法は非理性的であることが指摘されていた。先に見たところでは、理性的であるということは経験的であるということであった。すなわち、世界をありのままに捉えようとする態度が理性的である。このような態度は、‘反省的’であるといえるのではないか。

『判断力批判』では、迷信的・アニミズム的思考法を行う人について次のように言われている。“神に恐怖を抱く人間は、実際のところ、神の偉大さを賛嘆する精神性から程遠い。なぜなら、この人は抵抗することができずまた正当である力に対する自己の至らなさ自覚しているからである。神の偉大さを賛嘆するためには、平静なる瞑想への心情とまったく自由な判断 (eine Stimmung zur ruhigen Kontemplation und ganz freies Urteil) が必要である。”¹⁹すなわち、迷信的思考法においては、神は単なる恐怖の対象であるが、そこに反省的・瞑想的態度が生まれることによって、神はその相貌を変え、賛嘆 (bewundern) の対象となるのである。“恐怖をもつものは崇高性について判断することはできない。丁度、傾向性や欲求によって心が占められている人は、美 (das Schöne) について判断できないのと同様である。”²⁰とも言われる。美的判断は先にも述べたが、関心性から離れており、観想的・反省的である。美的判断それ自体、美的反省的判断 (die ästhetische reflektierende Urteile) とされている。対象から、一步下がって眺めるところに反省的態度があり、ここでは対象は恐怖の対象であることから崇高なるものとなる。ここにおいて、迷信的思考法から脱却することができるのである。美的判断は関心性をもたないゆえに、道徳的関心性を伴う道徳的判断とは異なる。しかし、これは道徳的判断へと連なっていくのである。このことは、結語において触れるこ

ととする。

反省的でないということは、主観的判断にとどまり、科学的・道徳の世界が見えてこないということである。しかし、科学的・道徳的世界もさらに反省の対象となるときには、神が問題となってくるのであるが、この場合、神は知の対象ではなく信仰の対象であるとされる。ところが、迷信的思考法においては、神に関しての知が存在する。『宗教論』第一篇の末尾の注において、信仰には独断的 (dogmatisch) と反省的 (reflektierenden) の二種の形態があるとされる。独断的信仰では、知 (Wissen) が前提とされ、ここから狂信、迷信、魔術等が生じるといわれる。ここで、独断的信仰に対して“理性にとって不誠実で僭越である”²¹と述べられていることに注目すべきである。迷信は人が宗教的对象を知ることができるという‘無反省的’なる越権的前提から生まれている。ここに、神の力が、功利的な意図の下に利用されるという迷信的關係が成立するのである。

2) 反省と啓蒙

“実を言えば、文化によって用意されたところの崇高と呼ばれるものも、倫理的展開がない未開人にとっては単に恐ろしいものに思われるのである”²²といわれる。迷信的・アニミズム的信仰において、人間は恐怖に満たされているのであるが、反省を通して、恐怖ではなく畏敬あるいは崇高の感情を持つことができるようになる。カントは宗教と迷信の区別を次のように立てる。“このようにしてのみ宗教は内的に迷信から次のように区別される。迷信には崇高なる物への畏敬がない。迷信では、人が従っている超越的存在を評価することなく、恐怖と不安に満たされているのである。”²³カントにおける‘宗教’の概念は、やや明確でないところがあるが、ここでは反省的道徳的内容を持ったものを指している。迷信の状態から反省を通して宗教的信仰に至るといえることは、非理性的未開の状態か

らの啓蒙であると考えられる。

反省的であるということは、受動的であることから能動的になることであり、奴隸的拘束状態から抜け出て、自由になることでもある。理性的であるということは、このような態度の転換によって生まれるのであるが、これはまさしく啓蒙 (Aufklärung) ということである。『思考の方向を定めるとはどういうことか』(Wie heißt sich im Denken orientieren? 1786) という論文においてカントは啓蒙とは自分で考えること (Selbstdenken) であるという。また、啓蒙とは単に知識 (Kenntnis) の中にあるのではなくして、たとえ知識を持っていてもそれをいかに使用するかを知らなければ意味がないとされる。“このような〔自分で考えるという〕試みをなすならば、ひとは迷信や狂信がこのような試みによってただちに消え行くのを見ることであろう……”²⁴といわれる。

『啓蒙とは何か』(Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?, 1784) という論文において、次のように言われる。“啓蒙とは、自ら責任のあるところの未成熟状態 (Unmündigkeit) から抜け出すことである。未成熟であることは他者の指導なしには、自己の悟性を使用する能力を持たないことである。自己責任ということはこのような未成熟をさすのであるが、この場合原因は理性の欠如にあるのではなくして、理性を他者の指導なしに使用する決断と勇気 (Mut) の欠如にあるのである。”²⁵ここでも明らかのように、啓蒙されているか否かは、悟性や理性の欠如にあるのではなくして、いかに自立的にそれらの機能を使用するかにある。このことは、ひとえに態度の問題すなわち、決断と勇気にかかわることなのである。

したがって、迷信から脱出するためには、反省的であると同時に、拘束的な未成熟の状態から抜け出そうとする自由への勇気が必要である。このようないわば態度が必要なのであって、この態度の下に理性の働きがあり、

理論的にも実践的にも啓蒙された世界が展開することとなる。反省と勇気は啓蒙的・理性的であることの大前提であり、それ自体理性的であるといっても構わないのではないか。結語において特に反省の問題を検討したい。

結語

反省があってはじめて、人間の精神は理性的展開をなす。理性的であることにとって反省の概念は鍵をなすのである。カントにおいて、反省は重層的になされており、反省に反省が重ねられている。以下、簡単にカントにおける反省の概念について考えたい。

『純粹理性批判』において、感性と悟性のかかわりにおける認識の構造ならびに成り立ちを論じた第一部門、第二部『超越論的論理学』を閉じるにあたってカントは‘反省’にたいして言及している。“反省 (Überlegung) (reflexio) は、対象に関して観念を得るために、対象とかかわることではない。すなわち、反省とは、心の状態 (der Zustand des Gemüts) なのであり、そこにおいてわれわれは、概念を得るための主観的条件を明らかにすることに取り組むのである。”²⁶といわれている。ここでの反省は、超越論的反省 (die transzendente Überlegung)²⁷といわれる。興味深いことは、認識がいかに成立するかという主観的条件を明らかにするためには (このことが、第二部の目的である)、反省という心の状態がまず存在して、そこから感性と悟性のかかわりが見出されるということである。単に、感性のみあるいは悟性のみにかかわっている状況から、一歩離れてより高いところから両者を見るという心の状態が認識の構造や成り立ちを知るための鍵となっている。

先に『判断力批判』において、対象が美的な観点から捉えられるとき、‘恐怖’から‘崇高’へと変貌することについて述べたが、この段階においては対象ははまだ美的判断の中にあり、理性的脈絡において捉えられてい

るとはいえない。しかし、理性的方向を目指しているのである。この間の経緯について考察する。

カントは、美的判断は理性的道徳的判断への橋渡し（Brücke）²⁸の役割を果たすと考える。たとえば、空にかかる星を眺めるときに、無限の空間が思いやられ、崇高なる感情を抱く。また、道徳的關係は人間の有限性と、人間性の無限性とを対比させるのであり、“道徳法則は、人間が本来持っている超越的存在の崇高性をわれわれに感じさせるのである”²⁹という。空間的・道徳的關係そのものは、規定的判断³⁰による理性的認識の対象である。したがって、理性的・規定判断が欠けるときには、占星術や狂信が生まれる。しかし、規定的判断そのものを反省的に見るときに、崇高な感情が抱かれているのである。『実践理性批判』の「結び」の冒頭において次のように言われる。“幾度も、そして持続して考えれば考えるほど、より新しいそして増大する感嘆と畏敬を持って心を満たすところのものが二つある。それは、輝く星によって散りばめられた私の上の天空と私の中にある道徳法則である。”³¹星と道徳法則は規定的判断においては、まったく共通性を持たないのであるが、美的反省的判断においては‘感嘆と畏敬’（崇高性）という感情で共通する。したがって、自然に崇高なる感情を持つということは道徳的になるための準備あるいは架け橋となる。いわゆる情操教育が意味を持つ所以である。自然的な崇高なる情操は反省的態度をもたらすのであり、道徳的認識への契機となる。“事実上、道徳的心情に類似する心情との一致なしに、自然の崇高性の感情を考えることは出来ない。崇高なる感情は道徳的感情と結びつくのである”³²とされる。このように美的情操が‘架け橋’の役割を持つとされるとき、重層的に反省がなされていることに注意しなければならない。すなわち、美的反省の結果としての崇高性が架け橋となると判断するところには更なる反省が見られ

るからである。

反省は認識的反省より美的判断に、美的反省より道徳的判断へと進むのであるが、更には道徳的反省より宗教的判断へと進むものと考えられる。反省はより深い何ものかに向けられているのである。宗教的判断は単に主観的構想力の働きと欲求が結びつくとき、迷信的思考法が形成される。ここには、反省的態度はなく、精神は即自的である。主観的構想力は即自的に働いているのであり、もし自覚的であるとすれば迷信的思考法からの脱却がある。迷信的思考法を自覚するところには、もはや迷信はない。主観と客観の区別が自覚されるところには、両者の混同は生じないのである。反省的に、美的なるものから道徳的な経路を通るならば宗教は反省的宗教となる。より反省的な視点がより包括的なものとするれば、反省的宗教は最も包括的なものとなる。

したがって、道徳と宗教の關係が問題となるときも、宗教は、それが反省的宗教である場合、道徳を包括する立場にあるのであって、互いに対立すると捉えることは妥当ではない。道徳と宗教の關係は大きなテーマであり、別に論じるべきであるが、ここでは、両者の關係に関していくつかの説を紹介し、問題を扱う方向性を考えたい。

カント研究者として著名なカッシーラー（Ernst Cassirer, 1874～1945）は、『カントの生涯と学説』（Kants Leben und Lehre, 1918）において、道徳と宗教の關係を考察している。ここでは、道徳が中心とされ、道徳が成立するためには宗教が必要とされないばかりか、宗教は道徳を完成させるために存在するものと考えられている。“カントの宗教哲学の内容は、カントにとって、カントの倫理学の内容に対しての単なる確証あるいは系にすぎない。‘単なる理性の限界内における’宗教は、

啓示の概念を知る必要がないばかりか、また知ることも許されないのであるが、それは純粹な道徳以外の本質的な内容を持つものではない。”³³とされる。

量 義治 (1931～) は、『宗教哲学としてのカント哲学』の第五章、「理性宗教とキリスト教」において、カントの宗教論は道徳性を重視するあまり、“実質的な啓示宗教を排除して、無内容な先天主義としての理性宗教に走ってしまったのである。……道徳から信仰を解することはできない。道徳的信仰は道徳であって信仰ではない、と言わなければならない。”³⁴としている。カッシーラも量も、カントの宗教論は実質的に道徳にとどまっており、宗教に言及するものの抽象的であり、生きた宗教的実存性を欠いていると主張するのである。

宇都宮芳明 (1931～) は、『カントと神』の中で、前二者とは別の見解を表明している。すなわち、『宗教論』においてカントは、啓示宗教としてのキリスト教を理性宗教と見ているのであるとして、『宗教論』における準備原稿を参照しつつ、“『単なる理性の限界内における宗教』と言う課題は、……すでに与えられているキリスト教のうちに含まれていて、しかも理性の限界内に属する事柄を、非体系的に一全体として総括したものを示す、と見ることができる……”³⁵とする。宇都宮によると、『宗教論』における方法は、「分析的」であることを、カント自身、準備原稿の中で指摘しているものであり、宗教論は生きた宗教を分析するところに成り立つのであって、総合的に理性を通じて形成されるものではないとする。³⁶本論では、宇都宮の立場を取る。生きた反省的宗教は必ずしもキリスト教とは限らないであろうが、カントにはそのような前提あるいは信仰があったと、考えられる。

カントは、常に無規定な生きた深淵を前にして思索したのである。すなわち、「反省」を通して、自己の前に展開する無限の深淵を

分析的に探っていくのである。ここに、カントの哲学的態度の根幹があり、この態度こそ根本的な意味において‘理性的’ということができはしまいか。

注

カントの著作の引用は全てアカデミー版 (Kant's Gesammelte Schriften, Herausgegeben von der königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften) による。巻数と頁数とを示す。なお、カントの著作は次のように略す。

KrV, Kritik der reinen Vernunft

KpV, Kritik der praktischen Vernunft

KU, Kritik der Urteilskraft

Rel., Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft

ProL., Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können

Schön u. Erh., Beobachtung über das Gefühl des Schönen und Erhabenen

W.i.Aufklär. ?, Beantwortung der Frage : Was ist Aufklärung ?

Was heißt : s. i. D or. ?, Was heißt : sich im Denken orientieren ?

Str. d Fak., Der Streit der Fakultäten

Anthr., Anthropologie im pragmatischer Absicht

1 Str. d Fak., 6, 65.

2 Anthr., 7, 193.

3 ProL., 4, 366.

4 Rel., 6, 177.

5 ibid., 174.

6 ibid., 176.

7 Schön u. Erh., 2, 251.

8 KpV, 5, 162~163.

9 Anthr., 7, 228.

10 ibid., 229.

11 ibid., 275.

- 12 KrV,3,235.
- 13 *ibid.*,75.
- 14 KU,5, § 9.
- 15 *ibid.*,205.
- 16 *ibid.*,178~179
- 17 *ibid.*, § 15.
- 18 *ibid.*,211.
- 19 *ibid.*,263.
- 20 *Ibid.*,261.
- 21 *Rel.*,6.52.
- 22 KU,5,265.
- 23 *ibid.*,264.
- 24 Was heißt: s. i. D. Or. ?,8,147.
- 25 W. i. Aufklär.?,8,135.
- 26 KrV.,3,214~215.
- 27 *ibid.*,215.
- 28 KU,5,195.
- 29 *ibid.*,88.
- 30 『判断力批判』においてカントは、判断を規定的判断 (ein bestimmtes Urteil) と反省的判断 (ein reflexitierendes Urteil)

とに分ける。前者は認識的判断であり、道徳的判断も含まれる。後者は、表象に対するものあるいは、認識そのものを対象として美的反省をなすものである。

- 31 KpV,5,161.
- 32 KU,5,208.
- 33 Ernst Cassirer, *Kants Leben und Lehre, Immanuel Kant Werke 11*, Berlin, 1923, s.407.
- 34 量 義治, *宗教哲学としてのカント哲学*, 勁草書房, 1990, 288頁.
- 35 宇都宮芳明, *カントと神*, 岩波書店, 1998, 267頁.
- 36 高坂正顕は『カント』(弘文堂書房, 昭和14年)で, “カントの方法は構成的ではなくして分析的である。……それは元来独立に存在する要素から全体を構成しようとするのではなく、むしろ具体的な全体を分析してその構造を明らかにしようとするのである。”(95頁)と述べている。

